



畫本西遊全傳

編
五



八遠21
2560
40-25



明 遠
流 2500
法 40-25

池 清



繪本西遊記二編卷之五

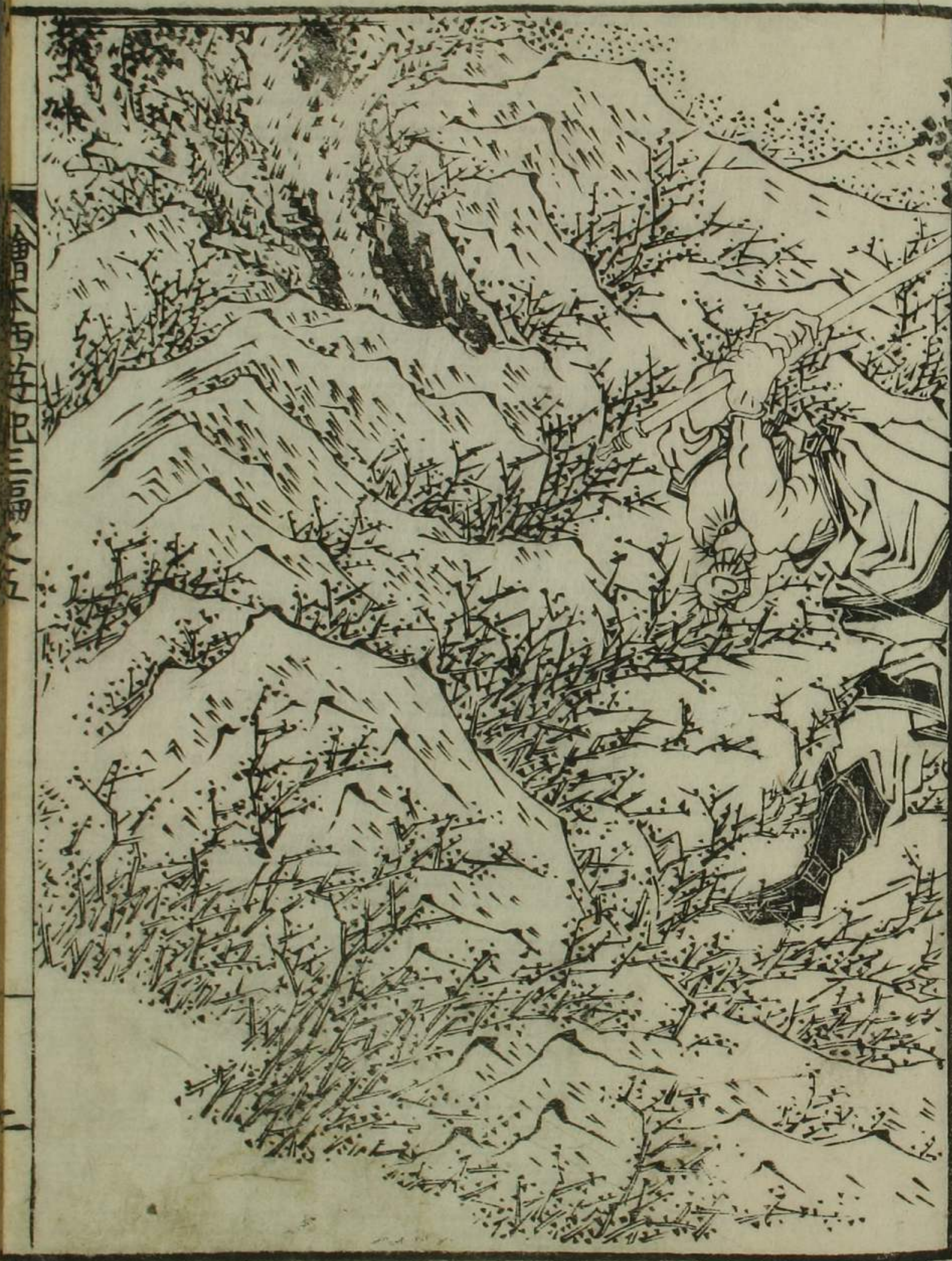
岳亭丘山譯

荆棘嶺悟能努力

木仙菴三藏談詩

此時冬々春も羊小推移り三藏師徒道を急ぎて進む処小勿忘長く
 続きける嶺あり荆棘參差と生茂く薛羅牽繞と這纏る甘下小此二女
 の路の形ハ残少りと雖も右左都て刺針の棘をを一步も前む支能行
 者是を見て老孫此山の光景見てまづ一とて頓て空中小飛昇り四方を
 伺ひ少時有て下りまゝり此山の行程千里計も有べし皆斯の如き荆棘
 つに二蔵大ハ驚き然もなぞ麼し之此山を越へきや八戒曰く師父曾ハ放
 心しよふ老猪よく道を開べしとて頓て印を借び真言を唱して其丈二十
 丈計の汝とつる亦釘釘と取て打振を三千丈の長とつる八戒師父を呼て
 曰く吾小続きて前の人と両手小て釘釘を把荆棘を掃除せば一釘釘小二

繪本西遊記三編之五



荆棘嶺八戒夜路開



荆棘嶺八戒夜路開

荆棘嶺八戒夜路開

十間二千間程づく掻除る小ぞ二藏大の惟喜跡小着て前より悟浄の
行囊と荷ひ行者の鉄棒を擧て道を問の助とる以行々百餘里を進
む處小既ふ天晚ふ及んで忽ち一箇の石碣を見ら上小荆棘嶺の三字を
刻と其下小二十四字の小字あり荆棘達摩八百里古来有道收入行
と有るを八戒打笑ひ吾是ふ兩句を添て後の照驗と做べとて筆を
出とて書寫す釘釘の刃を以て彫看る其二句小曰く自今八戒能陶
破直透西方路盡平と三藏忖然とて嬉喜馬と下て八戒を謝し
多ひ今宵の此處小て夜を明し翌又疾く往べと云るを八戒が曰く師
父斯る深山小住るも小更なる今宵の月も明るるを連夜小進る小
べし又釘釘を把て棘を拂ひ道を問く三藏是小抖搜して又夫より道を
跑し師徒更小手をも住めども且とも休ば馬の蹄を鳴つて竟小一昼夜と

駈のひ亦此日も暮小及て看る一座の古廟あり乍ち一陣の陰風發り
廟の後邊より一個の老人青臉紅鬚赤身儵牙する一個の鬼使小盤の
麵餅を齎せ出まり三藏の前小跪下て言々るを身人の此荆棘嶺の
土地神小て候ふ師徒道を駈て飢る小を悟麵餅を捧けて飢喝を助
け奉らんとき八戒是を聞て嬉ひ既小取んと為處を行者叱て你漫
る小近て更なる此老者曾て好人小非と又老者小向ひ言く曰
く汝何者るを我師父を誰惑んときるや且我一棒を嚙て見よと
鉄棒を把出を彼妖怪行者小見頭さ小忽ち一陣の怪風と成て三藏を
捉攫ひ去方知む成ふる行者們三個の者僕を慌忙騒々ども詮方
なく指方も無小尋ね搜は三藏の彼老者小攫ひ去と一箇の石崖の下
小到り三藏を下して老者が曰く我を曾て人を害はる者小非は此

荆棘嶺小年を経て住居する十八公と呼者なり今宵月清くて風静
 りしを聖僧を迎て友と會し詩を吟びて散悶をせんとな爲のこころに
 藏更小人心地もろく打戦てぞ居るる老人が曰く日吾菴へ入る
 とて手を拿て勞冊ふぞ二藏の恐怖立上り石屋小向ひる人を門の上
 文字あり木仙菴と字著るる裡入る座の時乍ち外面小色有て
 十八公聖僧を請まりやと云て入来る者あり二藏是を見入るは是二
 個の老者めて其容貌尋常なり一齋小入て礼を施すと二藏も礼を返
 して曰く貧道何の徳ありて仙翁の下愛を蒙るや十八公笑て曰く暮
 人們聖僧の道あるを爰を因及びて爰小待更年々僥倖ひふ今日爰
 小現るををゆり懼喜何ぞ是小過んや二藏の曰く方望の仙翁の
 大號を示しぬ十八公が曰く一個の孤直公一個の凌空子一個の松雷又

と号し暮人が蹄を勁節と号候ふ二藏問て又問て曰く列位老壽翁
 句ぞや此時孤直公が云

我壽今經千歳古
 香枝鬱々龍蛇伏
 自幼堅剛能堪老
 鳥棲鳳宿非九筆

凌空子笑て道

吾年千載傲風霜
 夜静有芭如雨滴
 盤根已得長生訣
 留鶴化竜非俗輩

拂雲曲又笑て道

歳寒 虚度有千秋
不徠 霽塵終冷淡
七賢 作侶同談詠
曼玉 敲金非瓊々

老景 瀟然清更幽
飽徑 霜雪自風流
六逸 為明共唱酬
天然 情性與仙遊

初節十八公笑て道

我亦 千年約有餘
堪憐 雨霜生成力
万壑 風烟惟我盛
益張 翠影留仙客

蒼然 貞秀自如々
借得 乾坤造化機
四時 洒落讓吾踈
博奕 調琴講道書

二藏是を聞て賞謝之曰く列位容形清くして亦奇なり且道を得て

高年小到る若や 高山の四皓小の有ざるう四個の老者答て曰く 過こ
る尊言唯疼之入のこつう 我門高山の四皓小あは深山の四探る豫
て聖僧の詩文神妙なるを羨り今宵請来つて吟哦を奉 些少心を
慰んと思つる 此時一箇の赤鬼一盤の茯苓膏と五盃の香茶を奉
る二藏怕と疑ひ慢らふ小舌は四個の老者一齋ふ是を嚙して更小餘
念つるを見て二藏衛々小落着二箇の茯苓膏を嚙り香茶を飲
密小室中を見ぬのみ満堂清雅小して 雅致なり此二女ゆ塵埃を知ら
十八公曰く聖僧原未有道の詩人う万望の一律を賦ゆ人二藏
を止まを得ば一律を吟とて曰く

杖錫 西来拜法王
金芝 二秀詩壇瑞

願求 妙典遠傳揚
宝樹 千花蓮蕊香

百尺竿頭須進壽
後成玉像莊嚴體

十方世界立行藏
極樂門前是道場

四老閑早これ是之賞讀十八公曰其人魚能りと雖も大眼
ふ今一首を和せんと

勁節孤高笑木王

碧椿不似我名揚

山空百丈竜蛇影

泉沁千年琥珀香

解與乾坤生氣繁

喜因風雨化行藏

衰殘自媿無仙骨

惟有苔膏結壽場

孤直公も又和と曰く

霜姿常喜宿禽王

四絕堂前大鬼揚

落重珠櫻蒙翠蓋

風輕石齒碎寒香

長廊夜靜吟色細

古殿秋陰淡影藏

元日迎春曾獻壽

老耒寄傲在山場

凌空子同く和と曰く

梁棟之才近帝王

大聖宮外有聲揚

暗軒恍花未青氣

暗壁尋常度翠香

壯節凜然千古秀

深根結矣九泉藏

凌雲世益婆娑影

不在群芳艷鹿場

拂雲叟並で和と曰

溟渤園中衆聖王

涓川千畝任分揚

翠筠不染湘娥淚

斑籜堪傳漢史香

露葉年々顔不改

霜柯代々節難藏

會入百卷史三編



細川内膳五郎

細川内膳五郎
 三藏淫戯
 杏仙女



濯靈修
 質盃神女標

西回

こま子西

杏仙女
 三藏淫戯

細川内膳五郎

子猷去世知音少

巨古留名翰墨場

三藏聞て仙翁の詩個々玉を吐錦を列ぬ吾實小惟喜小堪この
 今夜既ぬ更けぬ二個の徒弟們那里ある在こ我を待て万望
 仙翁五吾小道を教て飯る夏を免く久四老終て曰く聖僧心さ
 学めぬよ夜明をも自ら御弟子輩小逢すべし三藏尚も別言
 んくも死ふ勿心ち外面の方より入来る者あり三藏是を看すふ
 絶奇なる衣は表を著繞るる一個の仙女兩個の女童小絳紗の燈籠を
 捧けさせ流然とて入来る四老出迎て曰く杏仙怎麼とませらるや
 仙女笑喜を合て曰く今宵佳客の来臨ありと問故意々々まあり
 て相見え奉るる十八公三藏を指て佳客則ち爰小あり三藏身
 を屈めて仙女小礼をさし取て言へ交りは仙女十八公小向ひて

の盛會極めて佳吟まある其二句を示し人拂雲叟が曰く我
 詞俚くて又更小赤面を唯聖僧の妙句字小盛唐の風調めく
 を誦と個々羨むのと仙女が曰く万望其妙句を教る人四老同口
 小三藏の詩を述て問せむを仙女満面小笑を合て三藏小向ひて
 曰く自ら不才ゆて聖僧の妙句小答へ矢ねせん怕ありと雖も斯る
 佳作を聞つるのみ唯小止べきも无礼小似とむ鄙も一句を述て是
 を和奉んと下ち二律を吟して曰く

上苑名高衆卉王
 董仙偏愛春林陰
 雨潤紅姿嬌且艷
 自憐過熟微酸意

泗濱壇坫共称場
 孫楚曾吟寒食香
 煙蒸翠色頭還藏
 落死年々伴二麦場

四老此詩を聞て是清雅ゆくと佳吟なり且句の中小春意を念ひ
 ？仙女答て心と有と云つゝ三藏の傍に進倚色を低して耳語こ
 く佳客斯る良夜ふ到る何を待て鬱々として居るふそへ生の一世
 幾句を唯何更も捨りひて吾と快よく樂め人十八公が曰く古
 仙今聖僧小就て仰高の心あり聖僧又俯就の心あらんや仙是を憐
 ちさうの知趣の人あり孤直公が曰く聖僧の有道の師う管は
 輕初の更ふて此春意協ひごう我直く是と計らん拂雲更と十
 八公の媒妁とるる人凌空子と吾との婚姻を司り候はん三藏聞ゆ
 敢て色を愛が立場て你们都て同穴の妖怪怎麼婦人を扯答て我
 を誰惑さんとさるや四老三藏の怒りを奪つるを見て個々言を
 住め少時黙して居死ふ彼赤鬼大ふ怒り雷の如く小勃諍て曰く此

和尚何ぞ斯のどく不自らうや我姐々顔色の艶羨なる小斯の若死
 詩才あり你が為の相應の佳交なる小那ご心嫌ひて我主と羞むる
 や尚此更不随ぎんを我你を相三行て再度人界の飯をべうと
 既小執を羅んとすり三藏の驚た怕と口管ふ泣叫び涙雨のどくる
 ？仙女の彼鬼を扯住め三藏の傍に居倚万般と透る禱要袖の
 裡より汗布を把出して三藏の泪を押し佳客然様小氣胸の
 る我今汝と更小玉小倚香小依て慰まん這辺へまぬ人として手を奪
 るひきこ立る三藏増々泣喚き駈出さんと為死を座中の者ども此自立
 かゝし扯住めて放とる三藏の身を遁んと扯つ扣ゆる争ひたり行
 者とやが輩二個の師父の去方と尋煩て一夜豆をも住ごして越すある
 きりらけいが荆棘嶺を打越て天曉近き頃ふ到る何死ともなく三藏

の時が色は二個の者聞着てまを斎く師父々々と高きふ呼ぶ
くはを此色二藏の耳ふ入て噫と一色各ると斎く一座小右右女
怪ども忽ち形装の消失て寂として物も二藏の木仙菴を跳
いで僅ふ起ると思ひくがち三個小行遇々四個一斎小惟喜受
限りさ行者曰く師父今や那里小右左て奈何なる難為小遇
ゆひども二藏有くまども仔細語り彼十八公孤直公佛雲夢凌空
子杏仙女童赤鬼赤がまを落ゆる談話吾夢の如く小一
小土地を辨へばと雖も唯詩を談ぐる死を思ふ小此處より遠
らば二個是を同て然有る試み尋見べとて是彼と捺るる小一
の石崖小本仙菴の二字あり行者是こそ妖怪の巢穴とめと心を
住めて伺ひ見ふ一株の大檜樹老る拍古き松あり又一むの老

竹一株の丹楓あり崖の上古き杏の樹有て臘梅と丹桂と其一邊小
生立出る行者笑て汝小妖怪を見着るや八戒悟浄曾て見むと
各々行者彼老る樹毎小指て曰く是則ち妖怪る兩人尚其故
向を行者語て曰く彼十八公の松樹る孤直公の拍樹る凌空の檜
樹る拂雲叟の竹る又赤鬼の楓樹る杏仙の杏樹二人の女童の臘
梅と丹桂る八戒崗より釘鉤を把て彼本竹を根と俣小突倒せを果
然下際より鮮血淋漓とて流し出る二藏師徒駭き忙る討つるの
斯て二藏の恙なく又馬小乗て二個の徒身を従へ西方小進るゆ
妖邪假設小雷寺 四衆皆遭大厄難
去程小三藏の若千の日数と徑て一座の高山を越て平地の處小で遠
小向ひと眺し祥雲彩霧藹々として殿閣高樓あり二藏行者小向ひ

彼死の是何ゆら有ん行者頭を擧て遙小眺め答て曰は一構の寺院を
 彩雲祥霧藹々として錐も然と由亦凶氣あり彼死小到ゆらとも慢
 小門裡小入るべうらば二藏馬小鞭を加へて山門の前小到り見ハ雷音
 寺の二字有ニ藏馬より飛で下悟空を叱て曰く降猴今日既小雷音寺
 小行着うら小那ぞ凶氣有と云て我を敷きうらや行者笑て曰く師父過
 て我を恨るる山門の上小四箇の文字あり師父其の二字を讀て二字を
 洩ゆら何支ぞやニ藏馬を聞て再度能々打見せを是小雷音寺と寫
 着うらニ藏點頭て此死小雷音寺と云うらば必定一個の仏祖ある我
 們入て拜まゝ行者曰く此寺小入るの極めて凶及くして音少々念生火火小
 遭ゆらとも返まぐゆ老孫を恨るるニ藏の曰く吾東土を出る時一箇の
 誓言を立しり寺小遇を仏を拜し塔小遇は是を掃んと云うと當今寺小遭

て仏を拜を那ぞ你を恨んやと毘羅帽子を冠り金襴の袈裟衣をのけ
 山門の裡小入る門の邊小入在て大に呼つて曰く唐僧東土より来
 て如來を拜せんとうらう那ぞ箇様小无禮うらやニ藏是を聞て
 きり小軀を屈て拜を傲前入る八戒悟浄も同く拜し通る第二の門
 小到ると則ち如來の大殿小到る殿門の邊小入五百羅漢三千揭諦
 四大金剛八大菩薩比丘尼優婆塞亦並居うらニ藏八戒悟浄亦
 一歩々々小拜をまゝ如來の座前小到るとる行者の更小拜を傲然立
 躑つて居うらう亦小入在て呼つて曰く孫悟空你如來の尊小到り立
 て那ぞ拜を為さうらや行者大に小叱て曰く你们胆太き尊小畜生志
 生仏の尊名を誑り如來の尊体小化て佛の清徳を破りぬらや佛小
 目小のの見べきうらと鉄棒を以て打んとまゝ時忽ち挫し物音響て



空中より一箇の金鏡落下して行者が上小單ひ冠着行者は此裡
小肉籠て二寸も動せば八戒悟淨身を見て慌忙動らんときる正知正
彼五百羅漢三千揭諦の妖怪ども拿困え揺らせは二藏とも
扯扱て竟ふ二個偈縛細う彼如來の粧するの妖怪の大將にて
羅漢掲諦木の皆小的の妖怪より二藏を扯居て個々本相を顯
妖王小的の謂て曰く這二個を嚴く推籠おけよ彼行者の神通廣
大の願ふは彼斷が亡びざる間慢う小唐僧を食ひて此故小我今行者は金
鏡の裡小封じ籠置つる二日夜過ぎを管以化して水と成べし而右
彼三藏を請用せんと云くは小妖的の唯喜勇ま白馬の殿の後
小較だ彼昆羅帽子と金襴の袈裟の行囊の中へ置入奥深く藏
し置個々裡み入て敷えたり行者の彼金鏡の中み左て右み推左小

押ども此二歩も揺うに支能と身を如何の長大なるて突破んとま
さの備も此金鏡妙不思議の寶貝みて行者が身長大なる時を
金鏡も又長大なり行者身を此二小なる時の金鏡もまた縮こくは
を行者五六根の毛を扯技變て鉄鍊と做て是彼二三百度突
くはとも此二の透間も見ざるなり行者大小心を焦ち印を結び真
言を唱へ護法掲諦六丁六甲の諸神を呼々は列位の諸神降
りまき金鏡の外は焼く居て大聖今何の幹有て我れを呼ぬ
や行者曰く我今妖怪の爲み此金鏡の裡小装入りと種々法
を尽せども出る支切のむ你們力を尽て我を救ひ出さべし諸神是
を聞て力を合せて金鏡を排んと爲み分毫も動さず支能と護法
掲諦が曰く大聖此金鏡の示何なる寶貝小や當今上下一箇小

金鏡の裡小封じ籠置つる二日夜過ぎを管以化して水と成べし而右

合して一塊と成推どの拵ども排きぐく我々が力及さざしを
 今より玉帝小奏聞して其上方便と廻さべく大聖玉帝時待の人
 と六丁の神の唐僧を護りめ六甲の神の金鏡を守りめ祥雲と
 従尊して南天門ふ分つと到り了霄殿小前を登り玉帝小謂を奏
 して曰く臣の是唐僧を守り死の護法掲諦有り當今小雷音寺
 の妖怪唐僧們四個を落し以行者を控り金鏡の裡小装束三層
 夜おして化尽させ水と為んと以行者が命風燈のごと玉帝上言
 聖断有て渠が大難を救せり玉帝聞宣て頃ち二十八宿を宣て
 你們掲諦と俱お行て小雷音寺小到り妖怪を収め唐僧を助
 よと命ごの星宿列位勅を受けて掲諦と俱お了霄殿を退き
 下りて二更の時節小雷音寺小到る此時衆部の妖怪ともよく

熟睡て音もせぬ星宿金鏡の廻り小到り謂て曰く大聖我々は二
 十八宿より玉帝の勅を請て爰小来て汝を救めり行者聞て你亦
 疾く兵器を以て此金鏡を打破し星宿の曰く是れこそ金鏡を鑄こ
 るのあり打破らるる管はたい小御音て妖怪ども眼を醒はべ我
 兵器を以て金鏡を撞げ揚げ此女もて克き光りを見れば你身と爰
 ぞ溜り出よ行者理ると惟喜々少く諸位の星宿兵器を把出
 金鏡の縁小さしは是れと揚んと欲とも揚るまの少時置て兵器を挿べ
 き透向もろく彼是と立駭ぐらち早三更の頃小ありぬ行者の金鏡の
 裡小在て今や光克の見るると東を臨し西を顧り待り少くも此女
 の透向もええま目生宿の列り九金竜が曰く我今角の尖を以て
 金鏡を突串べ大聖裡小在て此女もて透向あると目んを疾く

身を變じて潛り出よ行者聞て心得るると相待と云ふ彼金竜鉄
の玉き角を以て千竹の力を極め金鏡を突串せを怪しや此金鏡
恰も人の肉の如く金竜が角小纏ひ此二枚も透間あるは行者裡小
左て金竜が角ふて突串する知と雖も此二の透間も見さるるは
手と同一角の廻りを搦り見ふ賣小毫らどの透もろろ行者呆拵
呆不更淋々々々風の漏べき隙も見むと少時沈吟しつら風と二
箇の手計と思當行者又謂て曰く金竜此二枚の疾を堪よ我今
此二枚計ありと耳の裡より金拵棒を把出し爰て二箇の鋼鑽と做
金竜の角の上小錐搦と云ふ孔と穿身を芥粒ほど小愛ふと錐の穴
小借り入て金竜快く角を抜べと呼こるるを金竜亦許すの力を
極めて衝々角を扯抜るる行者角の中より跳り出本相を頭く鉄棒

と推把て彼金鏡を打破むは宣ふ是銅山も崩れ倒る若き音勃
然と響き度り微塵小碎けて飛散る此物音小驚きて妖怪ども
睡を醒し驚波異ことを發起しと忽ち鏡を取て投着大鼓と鳴り
妖怪六を集め個々利針を扯提て大殿の前小跑集る妖怪の大將の彼
金鏡微塵小碎確散行者と二十八宿們の空中小立居るを見て大
小怒り小姑的命と金鏡を取集る一木の狼牙棒を打振る空
宙小蹴り升り行者們小向ひ汝小逃るとを道さんや且吾と唯二合
を戦ひ得が大夫夫と称さるる星宿大ふ叱て曰く汝は何の妖怪
今仏祖小変化唐僧を誑惑せや妖怪笑て曰く我の便ち黄眉
老仏より人我を尊拔て黄眉大王と崇む汝們孫行者此二枚計の
の法術あるを誇りて西方の道手小障る者」と怒心小振廻り豫る間

ぬ今日我と戦ひて志的勝を唐僧と返し汝をも助くべし
知勝支能の唐僧と俱に打殺し飯の菜め為べきなり行者吃々
と噴出し汝旦分お過ぐる海口を吐て後悔させ快く来て我捧を喫
ふべし妖怪狼牙棒を打振て打て羅と行者も鉄棒を指撒く五
六十合戦ひくる諸位の星宿星を助んと一奇に進まらば妖怪一隻手の
棒を使い腰より白布塔地呪を拿出り空に向ひて投ると見れば怪
や乍ち悟空をとりぬ二十八宿護法掲諦亦皆一同お彼袋の包ま
せたり妖怪を懽喜つゝ肩お擔きて寺内お帰ると小妖的們を呼出
し四五十箇の麻繩を把まらば裏より一個一個お出出盡般細
縛させ一邊お推籠おき庭宴を設けて懽喜を做裡お入く歌を
て天曉刻お到て行者身も憂くて豆粒ちどめり竟お縛索を長出

三藏を首め八戒悟浄二十八宿護法掲諦亦残りて細縛を脱
解き你亦師父を伴ひて快く逃し我の擔兒を拿て迹より行ん個
個懽喜頭て白馬を尋ゆて三藏を打棄せ門を出て列位の星神
一陣の狂風を卷く大路を指て馳去る行者の行囊を把返さん
裡へ入んとけしむもいんか威く閑て取て進まらば支能は行者一
隻の蝙蝠と變りて覺の透間より飛入門を越るま二層ゆり勿心
ち二階の窓より光明輝き出たる處より怪く思ひて指覗き目
を是三藏の行囊めて金襴の袈裟光りてを放ゆ右けり行囊有
中六の帷ひ悉く奪ひ拿肩お縛て出んとす時不期も一品の擔
兒を把落し板屋の當り知音をて妖怪馬き起出まらば煙光を
燒く伺ひ見ぬ此時行者の行囊を擔ひ窓下の透間より飛出け



會大西字三冊



終之西字三冊

る妖怪是心着て網縛置つる者どもを見よ一個の左さうけ
 るふそ妖怪たりのお怒を昏く那甲まを道まらきさうと狼牙棒を
 推取て个个未と云捨て宙を飛ぶぞ追跑する衆部の小妖
 的個々利斜を扯提て我後と続きう妖怪衛々二藏の追及
 大音お啼つて曰く禿子僕你们那里まで逃行ぞ速う縛を請
 よと雷言つと星宿天将輩是を見て皆一齋小轉回八戒
 悟浄も取て飯入乱れ責戦入行者も不爰時馳着まり鉄棒
 を閃いて妖怪どもを打散は此時二場の大戦ひて宜し是天も昏
 る地も動き神哭くと鬼呼ぶ日下ろ夕ふ到るまで息を絶て戦ひ
 が既ふ其日西山小傾き月亦東海小浮る出る此時妖怪腰よ
 り彼塔包児を把出さ行者快くも是を見着個々心を著よと

呼つるをども八戒悟浄を首とて衆位の天将輩の甘大故を八つ
 得む只管小戦ひる時妖怪心ち彼塔包児と扱揚る行者の急
 小筋斗雲小打乗穴中遙小飛去る其外の天将輩二藏八戒
 悟浄も俱小盡般彼搭包の中小装入る妖怪の勝凱を登寺
 中お飯り小妖的小命とて一個一個小細縛させ原々如く小押籠お
 きさう行者の漸々塔包児を道と雲を下して山の上小停立今
 田心惟小尺果て涙を流とて独言ける彼妖怪が塔包児の押何ホ
 の宝貝つとを斯大勢の人を仕入るや我今那里小行て故ひを需
 んと少時沈吟たりるが忽然思ひ着るまあり這般を北方の
 真武君蕩魔天尊を央て此妖怪を退治する人々を救へと頓々
 筋斗雲小打乗て南瞻部洲武吉山を指て飛ぶとく小馳去る池

池

